

## 曾我蕭白筆《群仙図屏風》と上巳・七夕

### 一八仙の選択理由とその目的一

春木晶子（江戸東京博物館）

蕭白の「奇想」の極と評される《群仙図屏風》(1764年)は、その奇怪な描写のみならず、通例と異なる八仙の選択もまた、議論の焦点である。先行研究は、八仙の候補に加え、一仙に複数の仙人の図像が重ねられること、三星図が混在することを指摘する。しかし、それら複雑な仕掛けの意図や意義は十分に検討されておらず、本作の意味や用途の解釈は、長寿の願いや祝いという、通例の八仙画題の解釈の域を出ない。本発表は、八仙の選択理由を問い、本作の意味と制作目的を再考し、発注者に論及する。

右隻の四仙は、董奉、簫史、李鉄拐、陳楠であり、いずれも、上巳（桃）の節句と関わる。医師の美称「杏林」を生んだ董奉は杏を介して桃を導き、簫の音色で鳳凰を呼んだ簫史は、その訓み「しょうし」が上巳を導く。役人を治療してその娘を得た董奉と、簫の腕で王の娘を得た簫史は、良縁を含む女の成長と幸せを願う上巳の節句に恰好の仙人である。李鉄拐は、その姓李が桃を導くのに加え、魂を遊離させているあいだに身体を焼かれ、別の死体を借りて蘇ったとの伝承は、上巳の流し雛の習いを喚起する。水上で鉢を持つ陳楠もまた、上巳の行事「曲水の宴」を想起させる。

左隻の四仙は、郭子儀、左慈、蝦蟇仙人、西王母であり、いずれも、別の神仙のイメージを内包しつつ、七夕の節句を喚起する。杉原たく哉によれば、郭子儀と左慈は、三星図の禄星と寿星である。童子を伴う図像で知られる郭子儀は、七月七日の夜、織女に遭遇し長寿と富貴を願ったとの逸話を有し、功をたてた「安禄山の戦い」により、同じく童子を伴う図像で知られる「禄」星と結びつく。曹操の宴で銅盤から鱸を取り出したという左慈の、その銅盤と、肩から掲げる団扇は、七夕行事「乞巧奠」で用いる水盥と梶の葉を喚起する。曹操を偲ぶ「赤壁賦」に、南斗（寿星）と牽牛星をよむ一節があり、本図は、左慈、曹操、南斗、牽牛、七夕という連想を内包すると考える。蝦蟇仙人に絡みつく蝦蟇を、西王母のもつ不死の薬を飲んで月に昇り、蟾蜍となった仙女嫦娥とみると、蝦蟇仙人は、明代の長編小説『西遊記』で、嫦娥に言いよったために天界を追われる天蓬元帥（のちの猪八戒）と重なる。天蓬元帥の職務は天の川の管理である。また耳搔きは、耳を洗う仙人許由と、その対をなす、牛を牽く仙人巢父を喚起し、やはり牽牛、七夕を導く。七夕と縁の深い西王母は、二人の女を伴うことで、七夕の織女三星に転化する。

以上のことから、本作の趣向は、右隻に春、左隻に秋の行事を描く二季景物画を、八仙で描くこと、すなわち、二季景物画と八仙図の融合にあると考える。

さらに、各仙の選択には、発注者と絵の贈答先が考慮されたと考える。本作が、津藩藤堂家から丸亀藩京極家への贈答品であり、前年の丸亀藩主京極高矩の死去が制作の契機であることを、仙人の逸話や伝承、本作での描かれ方を踏まえて、指摘する。